

Title	英國に於ける新組合主義の成立について
Author(s)	前川, 嘉一
Citation	經濟論叢 (1949), 63(3-4): 116-139
Issue Date	1949-04
URL	http://dx.doi.org/10.14989/132166
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

經濟論叢

第六十三卷 第三・四號

上代社會の封建制……………堀 江 保 藏

改良主義の窮乏化理論……………大 野 英 二

英國に於ける新組合主義の成立について……………前 川 嘉 一

京 都 大 學 經 濟 學 會

英國に於ける新組合主義の成立について

前 川 嘉 一

一 は し が き

英國資本主義の世界に於ける優位性が、英國勞働階級を一般的にブルジョア化せしめる傾向にあつたことは否定すべくもない。その長期に亘る産業的繁榮が、勞働者たちをして「甚しく士氣を阻喪せしめ」¹⁾事實英國の勞働階級は「ブルジョア化し、かくて凡ゆる國民の中の最もブルジョア的なこの國民が遂にブルジョアジーの側に、ブルジョアの貴族とブルジョアのプロレタリアートを持つに到らんとする」²⁾のが大體過去の姿である。

然し英國勞働階級内部に於いて、勞働者の「上層」と、「固有の意味でのプロレタリア的下層」³⁾の二系統の區別は明らかに認められ、このことについてレーニンも次の様に指摘している。「イギリスの勞働階級の狀態を美化するために、プロレタリアートの少數部分たるこの上層のみについて語るのが常である。」⁴⁾と。特に十九世紀末葉に至るまでの英國勞働組合運動は、主として前者による運動として展開されたものである。階級闘争としての勞働運動は、このような勞働者の「上層」によるものよりも、廣汎な一般勞働大衆の運動が問題とされなければならない。この意味に於いて十九世紀末の勞働組合運動を、主として未熟練勞働者によつて展開された新組合主義の成立を中心としてとりあげようと思う。

更に「就業者と失業者との間のあらゆる聯絡はかの法則（需要供給法則）の『純粹な』作用を攪亂する」ものであり、労働組合等によるこの兩者の協同によつて労働運動は強力に遂行される。十九世紀末葉の新組合主義に基く組合運動が、直接的には失業者と意識的に結合して行われたものでないにしても、失業者運動と不可分の關聯に於いて行われたものであることは後に述べる通りである。この點に於いても、當時の組合運動の意義が考えられはしないだろうか。

いうまでもなく英國労働組合運動は、特に帝國主義に移行した十九世紀後半に於いては、英國植民地に於ける労働者との關聯の下に考察されなければならない。この關係に於いて、正に英國労働組合運動は労働組合主義的政治に、即ち労働階級のブルジョア的政治に指向される傾向をもつて發展し來たつたのである。しかしここではこの點に留意しながら、英國労働組合運動自體に於ける、階級的統一への發展という觀點から、新組合主義の成立について考えてみたいと思う。

- 註 (1) マル・エン全集 改造社版第十八卷一四四頁。
(2) マル・エン全集 改造社版第十八卷二一七頁。
(3) レーニン、帝國主義論 岩波文庫一五二頁。
(4) レーニン、帝國主義論 岩波文庫一五二頁。
(5) 資本論 第一卷第二十三章 長谷部譯 第一卷第四分冊一五八頁。

二 新組合主義の經濟的社會的背景

周知の如く、一八四六年の穀物條令廢止以後の二十五年間は、英國資本主義の所謂“Golden Age”と稱せられ

る時期であり、「世界の工場」としての地位を占めた繼續的上向發展の時代であつた。

この十九世紀中葉の輝しい經濟的發展も、一八七三年を旋回點として衰退し、“Great Depression”と謂われる時期に入る。十九世紀末葉に於ける産業變動は、以前のものと性質を異にし、過剰生産が鋭い性質の代りに慢性的な性質をとり、英國産業は徐々に繁榮狀態から衰微の狀態へと推移し、世界市場に於ける支配を喪失する。

一八七三年を基點として“Golden Age”より“Great Depression”に移行した原因として、一

英國産業統計 1870—90年⁽²⁾

年	英國 輸出額 (百万磅)	英國 輸入額 (百万磅)	再輸出額 (百万磅)	貨物による 輸出額 （換算英國 輸出額）
1870	200	259	44	158
1871	223	271	61	169
1872	256	296	58	179
1873	255	315	56	175
1874	240	312	58	179
1875	223	314	58	177
1876	201	319	56	160
1877	199	341	53	160
1878	193	316	53	169
1879	192	306	57	176
1880	223	343	63	192
1881	234	334	63	209
1882	241	343	65	213
1883	240	361	66	222
1884	233	339	63	233
1885	213	313	58	224
1886	213	294	56	234
1887	222	303	59	249
1888	235	324	64	255
1889	249	361	67	262
1890	264	356	65	277

般に國際經濟的問題として競争國米、獨の勃興、第二にそれに關聯した英國産業組織の内部的諸問題に歸して考へられている。これらの事情は歸するところ、資本主義の發展より生じた過剰生産の結果であり、自由競争の必然的結果で

あつて、その内的矛盾のあらわれに外ならない。従つてここに自由貿易政策の否定となり、保護貿易主義の氣運が醸成され、新市場獲得のため新たに植民地の開拓、（自由競争の全盛期、即ち一八四〇—六〇年代に於いて、指導者達は植民政策の反對者であつたが、一八八七年の Jubilee の植民地會議は新政策の明らかな表現を與えた。⁵⁾）そして「イギリスの植民地略取は一

八六〇—八八〇年も最も激しく増加し、十九世紀の最後の二十年間に甚しく増加した。⁹⁾のである。資本の集中が要請され、帝國主義へ移行していった。

以上述べたところの十九世紀末葉の經濟的諸條件の下にあつて、資本は「貨殖」という資本制生産方法の絕對律に従つて、生産力の増大を計り、技術的組成の向上と共に、更により價值以下の勞働力を使用することによつて、この沈滞を克服して利潤の確保に努めたことはいうまでもない。かくてこのような經濟的諸條件は十九世紀末葉の勞働者の狀態に著しい變容を生ぜしめたことは當然である。

この產業的沈滞の打開は、新市場の獲得と共に商品の廉價提供、従つて生産費の低下に指向され、資本は勞働生産力の擴大のために生産規模の擴充を圖る。ここに新たな技術的手段が創出され、技術的組成の高度化は勞働の相對的需要の減少を惹起する。即ち、「一方では、蓄積の進行中に形成される追加資本は、その大いさに比例してますます少數の勞働者を吸引する。他方では新たな構成において週期的に再生産される舊資本は、從來それが就業させていた勞働者をますます多く反撥する。」⁹⁾

ここに過剩人口、即ち「産業豫備軍」が形成され、これと共に資本家は數少き勞働者に對し、「個々の勞働力の外延的または内包的搾取の増大により、より多くの勞働を流動させる。」利潤追求を基本とする資本主義社會は、能うる限りの少數の勞働者を充用し、低賃銀と勞働強化を以て價值増殖を遂行する。更にこの「産業豫備軍」が競争によつて、就業者を勞働強化に陥らしめることを考えるならば、この兩者の關聯の下に全體としての勞働者階級を問題とせねばならない。

従つてわれわれが勞働者の狀態を考察する場合に、組織勞働者の狀態を以てこれを論ずることは出來ず、就業者

から排除せられた失業者を含め、更に就業者そのものに於いても未熟練労働者、女子労働者、未組織労働者等を包含せしめた、統一的な労働階級を以て考えなければならない。

労働者の状態は多くの作用因子に基いて、改良され或は悪化するが、いま十九世紀末葉の英國労働者の状態を主として、失業、労働時間、賃銀の點より考えてみたい。

資本主義の發展が過剰人口を形成することは前述したところであるが、十九世紀末葉の英國資本主義機構の變轉が、如何に深刻な失業の形で以て労働者生活に影響を及したかは、労働運動の關聯に於いて注目しなければならない。特に七〇年代末の好況の崩壊は労働者の非常な減少を惹起した。例えばウェッブの調査せる三四組合の労働組合員數をみると、一八七五年二九七、六一五名が、一八八〇年には二五一、四五三名となつて、約一五%の減少

四産業部門組合員失業率
1870—80年⁽¹⁾

年	金屬造船工業	建築	室內裝飾木工	印刷製本	報台濟報組部失業率
1870	4.4	3.7	4.8	3.5	3.75
1871	1.3	2.5	3.5	2.0	1.65
1872	0.9	1.2	2.4	1.5	0.95
1873	1.4	0.9	1.8	1.3	1.15
1874	2.3	0.8	2.1	1.6	1.60
1875	3.5	0.6	2.0	1.6	2.20
1876	5.2	0.7	2.4	2.4	3.40
1877	6.3	1.2	3.5	2.6	4.40
1878	9.0	3.5	4.4	3.2	6.25
1879	15.3	8.2	8.3	4.0	10.70
1880	6.7	6.1	3.2	3.2	5.25
1881	3.8	5.2	2.7	2.8	3.55
1882	2.3	3.5	2.5	2.4	2.35
1883	2.7	3.6	2.5	2.2	2.60
1884	10.8	4.7	3.0	2.1	7.15
1885	12.9	7.1	4.1	2.5	8.55
1886	13.5	8.2	4.7	2.6	9.55
1887	10.4	6.5	3.6	2.2	7.15
1888	6.0	5.7	3.1	2.4	4.15
1889	2.3	3.0	2.4	2.5	2.05
1890	2.2	2.2	2.5	2.2	2.10

率を示している。失業が極めて複雑な現象であつて、正確な統計で以て示すことは出来ないが、一八七〇—一九〇〇年に至る間の年失業率を、個々に又綜合的に示せば次の通りである。

七〇年代末に非常な失業が生じ、その後一時の回復の後に、再び一八八四年より失業者が増加してい

る事實を知る。これは労働組合の報告により算定されたものであつて、更に非組織者たる一般労働大衆の間の失業が、組織者の失業よりも高率であることは推測されるところである。前表によつて知られるように、七四年からの失業の増大は八七年にその烈しさを失ひ始めた。しかし、ラノウスキーによれば、八七年三月の調査に於いて、ロンドンの成人労働者二九、四五一人中、二七％は失業し、特に船渠労働者は五五％、造船労働者は四四％の失業状態であつたことを指示している。¹²⁾

問題はこの様に増大した失業者が潜在的として止らず、顕在化した點にある。以前と異り、十九世紀末の英國經濟の一般的不振は、これらの多量の失業者を吸収し得ず、一度失業せる者はますます貧困化の過程に移らねばならなかつた。一部の労働階級の生活状態が改善されたとしても、それは正しく一部の組織労働者に限定され、廣汎な失業者の状態を考慮に入れるならば、七〇年以降の労働者の状態が決して改善されておらず、停滞もしくは悪化したとも考えられよう。

次に労働時間は十九世紀末、如何なる變化を示しているか。英國に於いて、労働強度は、クチンスキーによれば「十九世紀の初め三分の一の間は労働日の延長によつて増進され、それ以後は殆ど専ら、時間當りの労働量を増大することによつてなされた」と述べているが、労働日の過度の延長が肉體的労働力の限界に到達し、労働日の短縮が労働階級の要求とともに又、労働力保全の目的で資本家的配慮の下でなされ、かくて時間當りの労働量を増大することに指向されたことは當然である。然しながら、一般的沈滞にあつた七〇年以降に於いて、かかる資本家的配慮は消滅し、前述した通り外延的並びに内包的に労働生産力の増大という方法がとられるに及んだ。資本家は少數の労働者に對し、労働時間の延長によつて労働生産力を補充せんとした。

一八七八年より一八八〇年の間、殆ど凡ての職業に互つて、労働時間に關し一層危険なる蠶食が行はれ、各方面の雇主は労働時間の延長を求めた。即ちウェブの示すところによれば、クライド (Clyde) 地方の機械工は一八七一年に獲得した一週五十一時間制を失ひ、鐵工業傳主協會 (Iron Trade Employers' Association) は、九時間制採用以前に一般に行はれていた時間數に増加すべく、一週五十七時間乃至五十九時間制に復歸せしめんと企て、他の職業も同様にその名義上の標準労働時間をさへ維持せず、多くの都市に於いては、大工は労働時間を一週二、三時間づつ増加せられた。¹⁴⁾更にロンドンの煉瓦積工組合の「賃銀及び労働時間に關する報告」より知り得る労働時間の推移過程を例示すれば次の様である。

煉瓦積工組合
労働時間表 (13)

年	夏 期	冬 期
1871	56½	51
1872	53	48
1873	53	48
1874	52½	47
1875	53½	48
1876	54½	47
1877	54½	47
1878	50½	51
1879	50½	50½
1880	56½	50½
1881	56½	50½
1882	56½	50½
1883	56½	50½
1884	56½	50½
1885	56½	50½
1886	—	—
1887—1890	52½	48
1894	50	44½

一八七〇年より一八八〇年に至る十年間に於いて、罷案件數は、三五三、その多くが賃金の減少、労働時間の増加に對して起されたものであることは、この間の事情を物語るものである。¹⁰⁾この資本攻勢による労働時間の延長は一八〇年代に於いても改善されることなく、九〇年に至つて始めて短縮される。(このことは後述の新組

合運動との關聯に於いて理解される。)

以上によつて一八七〇年代及び八〇年代に労働時間の延長が一般的に強行された事實を知ることが出来る。

第三に當時の賃銀は如何なる過程にあつたか。失業度及び社會保險を考慮に入れた賃銀指數を、クチンスキーの

統計によつて示せば次の如くである。

質銀指數表⁽¹⁷⁾

週 期	實質質銀	相對的質銀
1859—68	63	124
1869—79	74	111
1880—86	80	96
1887—95	91	95
1896—1903	99	94

實質質銀は平均に於いて増加しつづけているのであるが、この増加が如何なる原因に基くものであるかをみなければ、われわれは直ちに労働者の状態の變動と關聯させることは早計である。クチンスキーによれば、一八五九—六八年の實質質銀指數六三から、一八八七—九五年の九一への増加の約三分の一は、低賃銀の産業から高賃銀部門への移行に、即ち英國經濟の構造的變化に基くものである。低賃銀の仕事は本國外部で、英國資本によつて使用される労働者によつてなされ、英本國に於ける工場での仕事は熟練した、そして比較的高賃銀の労働者によつてなされるようになったためである⁽¹⁸⁾。

あると述べている。實質質銀の變化を産業別にみると、不均衡の認められることによつて以上のことは明らかである。例へば農業及び纖維工業に於いては、七四年以降九一年に至る間停滯もしくは惡化しており平均として實質質銀の向上があるとしても、われわれは必ずしも一樣に改善されたものであるとは判斷出來ない。相對的質銀が漸次低下していることは前表によつて知られる。又當時の罷業の多くが賃銀の減額、労働時間の増加に對して行はれたものであることは言及したところである。(例へば鐵業部門に於いてはヨークシャー (Yorkshire) の鐵夫は七四年十月、二五%の減價に對し、八五年は一〇%の減額に對し、又ダーラム (Durham) の鐵山に於いては七九年二〇%—一五%の減額に對し、ロンドン機械工は資本家の七・五%の減額申込に對して、七九年二月争議をおこしている等⁽²⁰⁾)。

以上の諸條件の他、更に當時の住宅條件、健康條件を考へ併せるならば、十九世紀末に於ける英國労働者の状態は、全體として改善されておらず、むしろ停滯しているか、或ひは又惡くなりさへしたと判斷出來よう。一部の勞

働者の上層が改善されたにも拘らず、かかる一般労働階級の状態は“Golden Age”の下に發展し來つた組合運動に對し批判を生ぜしめ、この批判を通じて新たな組合運動が必要となつたわけである。

註 (1) マル・エン全集、改造社版第二十一卷一五九頁。

バラノウスキー、英國恐慌史論 鐵本譯 一四六、一四七頁。

(2) G.D.H. Cole, British Trade and Industry past and future, 1932, p. 99.

(3) Ibid, p. 95.

G.D.H. Cole, A Short History of the British Working Class Movement, vol. I, 1926, p. 134.

ヴァルガ、世界經濟恐慌史 第一卷第二部 永住譯、九八、一三六頁。

バラノウスキー、英國恐慌史論 鐵本譯 一五七—一六〇頁。

(4) 山中篤太郎、労働組合法の生成と變遷 三二二頁。

(5) G.D.H. Cole, A Short History of the British Working Class Movement, vol. I, 1926, p. 136.

(6) ハーリン、帝國主義論、岩波文庫 一一二頁。

(7) ハーリン、帝國主義論、岩波文庫 三一頁。

(8) 資本論 第一卷第二十三章、長谷部譯 第一卷第四分冊 一三五頁。

(9) 資本論 第一卷第二十三章、長谷部譯 第一卷第四分冊 一四八頁。

(10) Sidney and Beatrice Webb, History of Trade Unionism, 1920, p. 749.

(11) ベヴァリッジ、産業組織と失業問題 遊佐譯 五九—六一頁。

(12) バラノウスキー、英國恐慌史論 鐵本譯 四四〇頁。

(13) J. Kautsky, Labour Condition in Western Europe, 1936, p. 38.

(14) Sidney and Beatrice Webb, History of Trade Unionism, 1920.

(15) Bowley, Wages in the United Kingdom, p. 94.

(20)(19)(18)(17)(16)

George Howell, *Labour Legislation, Labour Movement and Labour Leaders*, vol. I, 1906, p. 389.

J. Kucynski, *Labour Condition in Western Europe*, 1936, p. 80.

Ibid. p. 61.

Ibid. p.p. 74—75.

George Howell, *Labour Legislation, Labour Movement and Labour Leaders*, vol. II 1905, p.p. 394—398.

三 新組合主義の成立

(A) 舊組合主義の本質 十九世紀末葉の英國組合運動を考ふるに際し、非常な經濟的繁榮の時代であつた、五〇年より七〇年初めにかけての組合運動の特色を明らかにしなければならない。チャーチズムの運動(*the Chartist Movement*)は一八四八年に終息し¹⁾、その後英國資本主義の輝しい發展をみて、勞働者は資本主義機構が自らを救ひ得るに値いするものであると期待をよせ、資本主義組織を受け入れ以て自己の改善を期した。即ち彼等は「昔のチャーチストの熱情を缺いて」²⁾いた。

従つて勞働組合は共濟團體として共濟的活動に限定され、共通職に緊密に結合された熟練工のみの團體として、貴族的排他的性格をもつものであつた。この十九世紀中葉の組合運動を更に立ち入つて考へてみることにする。

舊組合主義運動は「社會革命のあらゆる計畫を拋棄して、彼等は蒙つて來た最惡の法律的、産業的抑壓に對し斷乎として自ら闘争し、この目的のために徐々に近代産業國の構造の組成部分となるべき組織を建造した」³⁾ものであつて、その特色は先づ法律的抑壓に對する抵抗にあつた。立法的規律を獲得することによつて、組合の地位を確固たるものにならしめ、最低生活標準を法律によつて保持せんことを希望した。未だ不安定な組合の地位を確定化

するために、組合法の改正が必須の要件であつたことはいふまでもないが、勞働組合の目的達成の手段として法律によるものが、その獲得の過程に於いて極めて忍耐を必要とする困難な問題にも拘らず、資本階級に對する團體交渉よりもこれに求めたことは、十九世紀中葉の經濟的繁榮に照應するものである。勞働組合は資本家階級に對し溫和な目的を以て行動の慎重を期し、和解、仲裁の方策を採用した。同盟罷業は狀態を改善する手段としても、或ひは侵害の對抗に用いる方法としても禁止されるか又は極度に制限され、一般に同盟罷業の思想は全然棄てられるに至つたのである。(石工のボウツマス支部では同盟罷業という言葉も廢止すべきとの主張がなされた⁴⁾。)

十九世紀中葉の勞働組合は、多く熟練工のみによる組合として獨占的排他的性格を有していた。組合界の指導者達の、賃銀はそれぞれ階級の中の需給關係によるとの考えは、「既得利益」保持の思想と共に、當時の組合運動の獨占的排他的性格を形成せしめた。「一八四三年より一八八〇年までの間に於いては、需要供給説は決して一般的に承認せられていなかつたけれども、勞働組合思想界の大多數の心の中で優勢な地位を占めていた⁵⁾」のであつて、彼等は自己の條件を確保、又は改善せんとするために供給の制限によつて、即ち少年勞働者を制限し、更に正規の年期を入れた熟練工は不熟練工の採用を攻撃し、不熟練工及び他の不法なる人間を排除し⁶⁾た。組合の獨占的排他的性格は、當時の「新模型」(the New Model)と云つてゐた機械工合同組合、(Amalgamated Society of Engineers)に限らず一般的特質をなすものである。

次に當時の組合の職能が相互保險 (Mutual Insurance) の職分と合體して、共濟的性格を強く保持していたことが考えられる。例へば「機械業の諸團體は十八世紀の職人の職業團體と等しく、地方的な共濟組合として起つた⁷⁾」ものであり、最初から失業救濟金、旅行費補給、葬儀補助金及び傷害のため不具になつた場合の手當を支給し、更

に疾病救済金、養老金の支給等の業務を團體の主要目的となし、これが遂行のために週一志に及ぶ據金を必要とした。⁽⁴⁾かかる高率の組合費は高賃銀の熟練工によつて始めて可能なことはいうまでもない。共済的組織としての組合の機能が發展すればする程、業務の繁雜さはそのため有給職員の必要を惹起するまでに至り、その他の勞働條件の改善に對する行動を不活潑ならしめた。

以上十九世紀中葉の組合運動の性格が、熟練工の組合活動として獨占的排他的な、極めて溫和な目的をもつた共済的性格のものであることを述べた。かかる舊組合主義の運動は、五〇年代末より七〇年にかけて組合運動の基軸をなすものである。此の期間の後期に於いて、勞働組合運動の指導的立場にあつた幹部の小團體、即ちウエフブの言うジュンタ(Junta)の運動方針の中にも同様のことがみられるのである。「ジュンタの主たる目的が、基金の安全のためにも、組合が國家の一組成分子として勞働組合組織として認めさせるためにも、必要であつた法律的地位を組合主義のため獲得すること」であつて、事實六七年の主従法(Master and Servant Act)及び七一年の勞働組合法は彼等の運動の勝利による成果であつた。然しながら、産業上の爭議はこれを調停評議會による仲裁という調和政策に求め中産階級との妥協によつてその解決を計ることを目したのは舊組合主義の繼續に外ならぬ。

これらの組合運動が經濟機構の發展、勞働階級自體の變動に矛盾としてあらわれ、歸するところ、一部勞働者の上層の自助にすぎず、現實との分離が新たなる組合活動を生ぜしめるに及んだ。

註 (1) M. Beer, History of British Socialism, vol. I 1921. p. 172.

(2) マル・ヘン全集 改造社版 第十九卷二八七頁。

(3) Sidney and Beatrice Webb, History of Trade Unionism, 1920. p. 180.

- (4) Ibid. p. 199.
- (5) Sidney and Beatrice Webb, *Industrial Democracy*, 高野編譯 六九一頁。
- (6) Sidney and Beatrice Webb, *History of Trade Unionism*, 1920, p.p. 208, 214.
- (7) Ibid. p. 219.
- (8) Ibid. p.p. 208, 219.
- (9) Ibid. p. 284.

(B) 新組合運動の主體 十九世紀末葉の新組合主義は、英國社會經濟機構の發展にも拘らず舊組合主義運動が固定化し、その内包せる矛盾に基礎をもつものであつて、舊組合主義の內的矛盾の解明の裡に新組合運動の主體は明らかにならう。すでに當時の客觀的條件の變容をみたのであるが、これとともに勞働階級の主體的條件の變動が、如何に舊組合主義と矛盾を生ぜしめるに至つたのであらうか。

第一に、舊組合主義が元來、主として熟練工によつて組織せられ、貴族的排他的性格をもつ組合運動の方式という點である。産業革命時に比べては、當時の技術的革命に華々しいものはなかつたが、鐵鋼業、鐵道、鑛山業等に於ける一聯の發達は、新たなる機械の導入によつて勞働者の變化を招來する主要原因となつた。生産方法の改良は、過去の熟練工を廢黜せしめ、機械による勞働者數の減少或ひは半熟練工、未熟練工による代置を可能ならしめ、特に少年勞働力、女子勞働力を使用することになつた。この様に資本の要求に基く勞働者自體の變化は、熟練工にとつて從來享受していた特權及び利益の侵害であつた。従つて熟練工が自己の勞働條件を確保するために、人員制限の方策をとり、徒弟數の制限或は少年勞働者の制限を強制し、新入者を除外することに努め、排他的性格を持続したのである。機械工合同組合は徒弟を経ざる闖入者を「不法者として除外し、これは全體として一八八五年に至る

までの傾向であつた」のはその一例である。人員制限によるこの排他主義が明らかに特權ある組合員をして、その雇主と有利な交渉をなし得、彼等自身の團結を強固ならしめる有效な方法ではあつたが、それにも拘らず未熟練工の量的増加は著しく、ここに舊組合員との對立が生ずることになつた。排他的な獨占主義は、勢い大團體に加入し得られぬような職工を包含する他の組合の發達を促すに至る。

機械工及び金屬平削工の小地方俱樂部は、一八六七年と一八七二年の間に全國的組織に擴大し、これまで彼等が追従していた高級機械工の一顧を求め初め、合同眞鍮工全國協會 (the National Society of Amalgamated Brass-workers) 及び技師、機械工獨立團 (the Independent Order of Engineers and Machinists) 等は、一八七二年中に、標準賃銀をうけておられ職工を一切排斥する「貴族」的規則に對抗して立つていたのである。更に一八七八年から七九年に於ける既成組合内部の分裂は、組織労働者自身の弱體化を招來した。即ち生産方法の改善は材料の變遷をもたらし、従つて或る職業の中に部門間の對立を生み、既得利益確保のために、互に仕事の分界線に關する紛争を生じ、一八七九年の不況による失業の増大はますます仕事に對する蠶食の問題を生ぜしめた。例へば鐵工と眞鍮工、造船工と汽罐工の對立の如く、一産業での部門間の對立の激化は彼等相互の組織を弱らせ、又各部門間の政策の相違は組合の基礎を崩壊せしめるに至り、舊組合の獨占的性格が熟練工自體の敗退をもたした。かかる舊組合主義の貴族的排他主義が、熟練工自體を分派せしめると共に、未熟練工との二つの陣營に分裂せしめ、分裂の中から非組合員である半熟練工及び未熟練工が新たな組合運動の擔ひ手として、支配的勢力を徐々に確立するに至つた。

第二に舊組合主義の共濟的性格が、現實と背離した矛盾の點である。十九世紀中葉の勞働組合が調和政策をとつて同盟罷業を排斥し、強く保險會社の如き職分を採用し、共濟金の蓄積にのみ専念したことは前述したところであ

る。この労働組合の相互保険は、ウェッブに従へば「互に性質を異にする二種の共助金 (Benefit) より成立つてゐる。『共濟』 (Friendly) と『失業』 (Out of work) の兩者これである。疾病、災害及び老年の如き身體的個人的事故に對する保険と、單に職を得ることを能はざるが爲に生じたる所得の杜絶に對する保険との間には本質的相違が存する。」そしてこの目的は労働階級の團體組織の助けに、即ち共濟制度を施行して組合費を支拂ふことによつて、組合員を強く組合に結合せしめるのである。それと共に、失業手当制度は根本的に組合員の労働條件を維持するために、組合員相互の競争によつて標準賃銀率及びその他の正規の雇傭條件の侵害を阻止するために行はれるのであつて、特に十九世紀後半に至るや、前者よりも後者に重點がおかれるに至つた。そしてこれが遂行のために高率の組合費が必要とされ、それは貴族的労働者によつて始めて可能であつたことはすでに述べた通りである。労働者にかかる性格の組合主義のうちに慰安を得なかつた。即ち古い有力であつた組合は、疾病埋葬クラブにすぎないものとなり、不況の年の續くに於て手當金は減じ會費は高くなり、多くの組合員は「共助金授領外」の組合員として無援の狀態におかれ、従つて一般労働者特に年少労働者にとつて遊離した組合方策であつた。前述の意圖を以てなされた相互保険が、業務の山積のため極めて困難になるとともに、十九世紀末葉に於ける資本の攻勢に基き、労働條件悪化に對抗する爭議の増加失業の増大にこの共濟基金は費消され、その基礎を崩壊するに至つた。

(われわれは如何に失業者を支持するために組合費が缺乏したかの多くの例を見出す。即ち機械工合同組合は失業者に對し、七〇—七四年の九四、〇九六磅が七五—七七年には三五六、七四九磅に、窮迫者に對しては、七、六八三磅が二〇、九八二磅と増加し、五年間に二七二、九五二磅の増加支出をみ、汽罐工及び鐵造船工は同じ期間に八九、四〇三磅を費消し、爭議に於いても主たるものをみると、例えば、一八七七年ロンドン煉瓦工の一、七〇〇名が三三週間に亙る罷業に二六、二〇六磅一七志五片を消費し、七十年の造船工、汽罐工、鐵造船工の罷業爭議は三、〇〇〇名が七週間續行し、その費用一五萬磅を計上している。)

このように排他主義と相表裏した共済的性格は、労働者上層部の組合政策として、全く一般労働者とは遊離したものであり、しかも産業の不況に際してその限界を明らかにするに及び、鋭く批判されたことはいうまでもない。ジョン・バーンズ (John Burns) は一八八七年次の様に述べている。「組合主義は自己崩壊の原因をそれ自體の裡にもつてゐる。……中流階級の主張に基き、疾病、養老金という性質で國家或ひは社會のみが負擔し得る義務と責任を彼等が向うみずに引受けていることは、組合員にとつて堪ゆべからざる負擔を課することによつて大なる組合を粉砕しつつある。そして共済組合の責任を果し得ないことの恐れがしばしば抵抗もなく雇主による蠶食に従はしめる。この結果組合のすべては労働者の權利を擁護する組合たることをやめ、中産及び上流階級の負擔軽減の機關になり下つた。」と。

舊組合主義固有の性格が社會經濟機構の發展にも拘らず固定化したことが、對立物としての半熟練工及び未熟練工の新たな組合運動を引き起した。新組合運動は、過去の貴族的労働者に對する低組織者、未組織者たる労働者を主體として運動が展開されたのである。

この運動に於いて、英國インテリ中産階級の努力を認めないわけにはゆかない。當時の主要な社會主義團體とみなされていたのは、社會民主聯盟 (The Social Democratic Federation) とフェビアン協會 (The Fabian Society) であり、何れも知識階級の集團であつた。社會民主聯盟が一八八七年六月、その機關紙「正義」(Justice) に「獨立した職業の努力の時代はすぎ去つた。……熟練、不熟練一切の階層の労働者の完全な組織なくしては階級としての労働者のために何物も得られない。……故に組合員たると非組合員とを問はずあらゆる職業の熟練工に對して同胞たる未熟練工と共に又吾々社會民主主義者と共に共同の運動をなすことを熱望する。」と述べ、フェビアン協會も亦その集産主義

の普及に努め、これらが新組合運動に強く影響を及したことは否定すべくもない。事實社會民主聯盟の指導者は一八八六年の失業者の大運動を指揮し、又勞働組合内部で舊組合主義者の改宗に努めた。¹⁰⁾これらの團體が勞働組合運動に大きな示唆を與へ、勞働者階級の統一に功績のあつたことは充分考へねばならない。然し又これらの故に新組合運動が組合主義として改良主義に推し進められたことを考へなければならぬ。社會主義の發展に於いて、これらの役割を過少評價することは嚴に慎まなければならないとしても、運動の主體はあくまで勞働者であり、しかも勞働運動を改良主義化たらしめた點より考へてもそれを過重に評價することは注意せねばならない。

註

- (1) Sidney and Beatrice Webb, *Industrial Democracy*. 高野編譯 五七一頁。
- (2) Sidney and Beatrice Webb, *History of Trade Unionism*. 1920. p. 323.
- (3) Ibid. p. 332. 333.
- (4) Sidney and Beatrice Webb, *Industrial Democracy*. 高野編譯 一七五頁。
- (5) Sidney and Beatrice Webb, *History of Trade Unionism*. 1920. p. 383.
- (6) George Howell, *Labour Legislation, Labour Movement and Labour Leaders*. vol. II. 1905. p. 332.
- (7) Ibid. pp. 394. 395.
- (8) Sidney and Beatrice Webb, *History of Trade Unionism*. 1920. p. 385.
- (9) Ibid. p. 410.
- (10) G.D.H. Cole, *A Short History of the British Working Class Movement*. vol. I. 1926. p.p. 155. 156.

(C) 新組合運動の展開 舊組合主義に對抗して立つた非熟練工の運動は七〇年代初めに見出される。即ち一八七一年、大工、石工、煉瓦積工、鉛管敷設工及びその他の團體の支部役員の勞働時間の短縮、賃銀率増加に關する運動は非組合員が先頭に立ち、七二年には技師及び機械工獨立團並びに合同眞鍮工全國協會等が、高い標準賃銀をうけておらぬ職工を排斥する貴族的規則に反抗して立ち、又同年ガス火夫組合は當時の未熟練工の「新組合」の

一つであつた。

然し七〇年初期の新組合運動は七八―七九年の不況に於いて消滅し去つたが、この沈滞からの活動は先づ鑛山業に於いてみられた。スライディング・スケール (Sliding Scale) の反對運動を中心として、若い坑夫からヨークシヤ坑夫協會 (Yorkshire Miners Association) が八一年に、その翌年にはランカシヤ (Lancashire) に同じく坑夫の組合が組織され、かくて順次に鑛山業部門に於ける新組合運動は展開されて、八八年に舊全國組合から離れ、英國坑夫聯盟 (the Miners' Federation of Great Britain) が誕生した。他の部門に於いても「新組合」は勃興し始め、八一年に少數の熟練工とは別に、未組織であつた毛織物部門の勞働者は一般纖維勞働者組合 (the General Union of Textile Workers) を組織し、八四年には合同織布工協會 (the Amalgamated Weavers' Association)、八七年には聯合纖維工場勞働者協會 (the United Textile Factory Workers' Association)、更に鋼鐵製鍊工組合 (the Steel Smelters' Union) 等が徐々に形成されつゝあつた。然しながら組織的攻撃がみられるのは八七年である。

この新組合運動の昂揚をみるに際し、失業者運動との關聯を考えねばならない。失業者運動を單に勞働組合外の運動として輕視するには餘りにも深い關係を有している。七〇年代より増加し始めた失業者が、一時的小康の後、再び八四年より急激に増大したことは前述したところである。この次第に増加した失業者は、遂に八六年にロンドンのトラファルガ廣場 (Trafalgar Square) に集合し暴動となり、その結果彈壓されたにも拘らず、更に翌八七年十一月には再び同じ場所に於いて、所謂「流血の日曜日」 (Bloody Sunday) として知られる大運動を展開した。⁶⁾「此の運動はロンドン及びその他の大都市に集中している不熟練勞働者又は半熟練勞働者の大軍にとつては救済の福音の如く響いた」のであつた。この一八八六年及び八七年の失業者運動と關聯して、新勞働組合運動が八九年に頂點に達し

たのであつて、兩者の關係を見通すわけにはいかない。更にこの失業者運動が當初自然發生的なものとして展開したのであるが、社會民主聯盟の指導者がそれを組織化し、特にバーンズの如き勞働組合出身の、而も新組合主義者が努力したことを考えるならば、この點に於いても新組合運動と失業者運動の關聯性が認められ、勞働階級運動として兩者を統一的に考えなければならぬと思う。

一八八七年は前述せる失業者の運動と、勞働組合會議に於ける舊組合主義者の敗北の意味に於いて、コールの言ふ如く「運命の年」である。この時期より組合内部の熟練工自體の中にも新組合主義の浸透を見出し得る。若い職工は年長者の組合員の排他的冷淡な政策に不満をいだき、年少職工よりなる「新組合主義者」の一派が起りつつあつたことを、合同機械工組合 (the Amalgamated Society of Engineers) 或ひはロンドン植字工協會 (the London Society of Compositors) の如き貴族的組合の内部にみられる。彼らは組合の保險會社的性格、低賃銀者の除外に反對し、組合の政治的勢力を利用することを主張したのであつた。かくて八九年には未熟練工の團結はその頂點に達する。八八年行はれたマツチ女工、六七二名の同盟罷業は二週間の後に女工の勝利に歸し、八九年八月一日を期して行はれたガス工及び一般勞働組合 (the Gas workers and General Labourers' Union) は、賃銀の増額及び十二時間より八時間への勞働時間の短縮に成功した。この未組織、未熟練工の勝利はせまり来る動亂の警鐘であつた。即ち八九年八月十二日茶業勞働者及び一般勞働組合 (the Tea-workers and General Labourers' Union) の一定の船荷に對する「割増」の額に關する爭議は、未組織者であり、未熟練勞働者である全船渠勞働者一萬名の罷業を生ぜしめるに及んだ。その要求は一時間六片、下請及び請負仕事の廢止、殘業に對する割増、雇傭期間の最小限を四時間とすることであつて、「凡てのもの組合主義」という新組合主義者の叫びと共に確固たる團結の下、遂にその要求を貫徹した。この爭議に於

いて未組織者が主體となり運動を展開し、闘争を通じて彼らは次第に組織化したこと、第二に比較的高賃銀の熟練労働者である沖積人夫の二つの有力な組合 (The Union of Stevedores) が後から合同し、前者と統一的に争議をなしたと、第三に一般社会からの援助、即ち多額の寄附金 (四萬八千七百三十三磅) が集り、特に濠洲労働者よりの援助があったこと等注目しなければならぬ。

船渠労働者の争議の成切が、新組合運動を促進せしめる重要な契機となつたことはいうまでもない。即ち「船渠労働者の勝利後一ヶ年間に恐らく二十萬人の労働者は新たに労働組合の隊伍に加えられたが、これらは労働界にあつて團體を組織し能はだるものとして従來抛擲されていた部分から募集せられた」と言はれる以上の、八九年を劃期とした念激な労働組合及び組合員数の増加を次表によつて知るのである。

労働組合大會に屬する團體數⁽¹²⁾

年	労働組合	労働協議會	(單位千) 労働組合員	(單位千) 労働協議會員
1880	89	16	381	95
1881	—	—	—	—
1882	103	23	404	103
1883	114	21	469	94
1884	95	21	488	110
1885	110	27	500	131
1886	98	23	514	123
1887	104	27	561	135
1888	109	29	568	159
1889	149	26	687	176
1890	268	37	1,593	334
1891	274	36	1,094	260
1892	251	37	1,153	496
1893	198	28	721	150
1894	165	27	1,015	66
1895	170	—	1,000	—
1896	178	—	1,076	—
1897	180	—	1,093	—
1898	188	—	1,184	—
1899	181	—	1,200	—
1900	184	—	1,250	—

(1) 労働協議會は1894年以後労働組合大會から除外

この新組合運動の發展が労働條件を改善せしめる大きな原因となつたことは當然である。このことは前掲の賃銀

指數の推移及び煉瓦積工の労働時間表の一例によつても、實質賃銀の向上、労働時間の短縮の事實を推測し得よう。殊に過去の労働組合運動による労働條件の向上が主として労働者の「上層」に限られていたのに對し、賃銀の上昇が未練工に多くみられるに至つたことは注目されねばならない。¹³⁾

新組合主義はその後一八九三年の不況に於いて一時的衰退を生じ、舊組合主義の擡頭があつて、組合員數の減少はしてもその組織は崩壊することなく、新舊兩組合主義は相互に作用した。即ち新組合はこの不況を契機に、闘争的熱情を失う組合もあり、又舊組合は未熟練工に門戸を解放し、その兩者の型は喪失され統一的傾向を生じたと考へられている。¹⁴⁾

この様に舊組合主義に對抗して生れた新組合主義が、著しく性格を異にしたことはない。會費の低廉、會員の多數をもつて特色となし、その特徴的精神は戰闘的團體として、何らの疾病又は傷害基金に煩はされないものであり、その目的は大部分政治的であつたことは、ウェップも指摘する所である。¹⁵⁾労働者の「上層」によつて組織され、排他的、共済的性格をもつた舊組合主義と明らかに對比され得るのである。

- (1) Sidney and Beatrice Webb, *History of Trade Unionism*, 1920, p. 316.
- (2) *Ibid.* p. 323.
- (3) G.D.H. Cole, *A Short History of the British Working Class Movement*, vol. I, 1926, p. 121.
- (4) *Ibid.* p.p. 152, 153.
- (5) *Ibid.* p. 154.
- (6) M. Beer, *History of British Socialism*, vol. II, 1921, p.p. 261—263.
- (7) Sidney and Beatrice Webb, *History of Trade Unionism*, 1920, p. 388.
- (8) G.D.H. Cole, *A Short History of the British Working Class Movement*, vol. I, 1926, p. 154.

- (9) Sidney and Beatrice Webb, History of Trade Unionism, 1920, p.p. 388, 389.
 (10) Ibid p.p. 402—404.
 (11) G.D.H. Cole, A Short History of the British Working Class Movement, vol. II, 1926, p.p. 159, 160.
 (12) Sidney and Beatrice Webb, History of Trade Unionism, 1920, p. 406.
 (13) G.D.H. Cole, Organised Labour, 1924, p. 154.
 (14) G.D.H. Cole, A Short History of the British Working Class Movement, vol. II, 1926, p. 163.
 (15) Ibid, p. 180.
 Sidney and Beatrice Webb, History of Trade Unionism, 1920, p. 406.

四　　つ　　び

十九世紀末葉の新組合主義の成立過程について以上みてきた。ウェッブの言う如く、労働組合運動が不熟練労働者の間に普及せられたことは、何ら新規な發明ではないとして考えるべきであらうか。彼によれば、労働組合運動はその全歴史を一貫して、二つの團體の類型——職工共済團體及び不熟練労働者の進取的な團體——が並存し、特殊な危機に際しこの二つの類型の何れかがたまたま重要な位置を占めて、その特定の時代の「新組合主義」を生じるものである。³⁾

この様に二つの團體組織の類型間の、勢力關係の結果であるとみなすことは、資本主義社會の發展に照應して、労働組合自體が労働者の「上層」の團體としてでなく、不熟練工及び低賃銀労働者を含めた組織として、労働階級の社會的勢力を結集し労働階級の統一を目指すという、階級としての歴史的發展を輕視するものではからうか。當る程一八二九—三四年に、全賃銀労働者の完全なる共同團結という理想の下に、新組合主義は形成された。當

時の新組合主義は、「あらゆる労働者を包含すべき一大團體を作らんとする労働組合の首領側に於ける企てであり」その主たる指導がジョン・ドウハアティ (John Doarthy) によつてなされたのである。それは正に少數組合幹部の指導によるものであり、労働者上層部と一般労働階級の遊離という現實の地盤から、既成労働組合の批判を通じて生れた労働者階級の下層自體の運動ではなかつた。この點に十九世紀末葉の新組合運動との相異が明らかにされなければならぬ。

不熟練労働者をも包含した労働組合運動という現象に於いて、十九世紀末葉の新組合運動は何ら新しいものでない。しかし舊組合主義の、現實との矛盾のうちから主として未熟練労働者が主體となつて新たな組合運動を展開し、社會的政治的に労働階級の勢力を統一しようとした歴史的発展は無視さるべきでない。この點に十九世紀末の新組合主義の英國労働組合運動に於ける意義が存すると考えられよう。しかも前述した通り失業者運動と不可分の關聯を有し、英國に於ける労働階級の統一過程として注目すべきであると思う。

然しながら新組合主義が、依然として労働組合主義であるという基本的事實は忘れられるべきではない。ジョー・ジ・ボウエルは「新組合主義は舊組合主義に包攝された」とみなすのであるが、新組合主義が舊組合内部にも侵透し多くの改宗者を生じ、その發展期にはむしろ舊組合主義が新組合主義に包攝されて來たこと、その後兩者が相互的に作用して統一的に發展したことを考えるならば、單に新組合主義が舊組合主義に併合されたとは思はれない。然しその新舊兩組合主義の統一的發展ということが、尙労働組合主義という基本線に副つてものであつたことは考えねばならぬ。

英國經濟機構の世界に於ける優位性が、十九世紀中葉に比べて弱體化したとは云へ尙確固たる地盤を有し、帝國

主義への移行によつて利潤の確保が可能であつたことは、資本階級の方策即ち労働者を分裂せしめ、彼らの中に於ける日和見主義を強化しようとする資本階級の努力と相俟つて、新組合主義者をして舊組合主義をも容れしめ、依然として組合主義にとどまらしめたのである。この點に於いて十九世紀末の新組合運動が、主として未熟練工によつて展開されながらも十分労働大衆に浸透し得ず、未だ強力に遂行されなかつた。

(新組合運動によつて、組合員の急激な増加があるとは云え、一八九一年に於いて、組合員總數約一、〇九四、〇〇〇人、同年商工業従業者數は九、〇二五、九〇二人で約一二%にすぎない。)

周知の通り十九世紀末復活した英國の社會主義が、議會主義的、改良主義となつて發展してきた。かかる形態をとつた基礎は、既に言及した如く、英國自體の社會經濟構成にあることは言うまでもない。そしてこのことは労働運動との關聯に於いて明かにされるのである。即ちこの新組合主義の成立に於いても、それは歸するところ組合主義にとどまつた事實に徴しても明かであらう。社會主義遂行の擔ひ手が一般労働者であるにも拘らず、英國に於いて労働階級の、特にその指導者層の貴族化が、英國社會主義を改良主義として、漸進的方向に至らしめたと考えられよう。

以上十九世紀末葉の英國労働組合運動を、新組合主義の成立を中心としてみたわけである。その政治的側面はそれ自體重要な問題であり、二十世紀の問題はこの點より始まるとも考えられる。これに關しては又別の機會に考えたいと思う。

註

- (1) Sidney and Beatrice Webb, History of Trade Unionism, 1920, p. 416.
- (2) Ibid p. 416.
- (3) Ibid p. 114.
- (4) G.D.H. Cole, Organised Labour, 1924, p. 154.
- (5) Abstract of Labour Statistics of the United Kingdom, 1902, p. 179.